

抗争後の其蹟

都賀庭鐘は、初期読本の嚆矢とも言うべき『古今奇談英草紙』〔寛延二（一七四九）〕に於て、こう書いている。

生れて滑稽の道を弁へねば、聞者を悦ばすべきなけれども、風雅の詞に疎きが故に、其父俗に遠からず。草沢に人となれば市街の通言をしらず、幸にして歌舞妓の草紙に似す（序）。

と。傍点部について、中村幸彦氏は「云ふことは、八文字屋本の後塵を拝するに過ぎよし」としないの意である」〔読本発生に関する諸問題』『近世小説史の研究』二八五頁〕と、明快に説明する。

一方、日野龍夫氏は「一つの正義が究極の価値として全編を支配し、各要素はその正義の実現に奉仕するためにのみ存在を許される」という時代物浄瑠璃の歴史観に反発する気持が、上田秋成の初期浮世草子にも見られるとしている〔秋成と時代物浄瑠璃』『文学』・昭和五七年一〇月・二五頁〕。

一見、無関係と考える二つの事例を並べたのは外でもない。それは、時代物歌舞伎・浄瑠璃の〈世界〉や歴史観に安易に寄り掛かったとされる八文字屋の所謂〈五冊物〉（この呼称を用いる理由については後述する）が、その後の作品やジャンルによってどう克服されたのか、という極めて文学史的な問いかけに対する解答を導く鍵が、これらの事例の中に秘められていると考えるからである。

長編小説であることや、時代物であるという点で、八文字屋の〈五冊物〉と、初期読本とは一見類似している。しかし、中村幸彦氏によれば、両者の違いは次の六点に於て歴然としているという（前掲書・二五九頁から二六〇頁）。

篠原進

①構成の妙。②芸術的真実性への配慮。③和漢雅俗混淆の超時代的文体。④その素材を演劇戯曲によらず、直接史書、古典により、時代考証や歴史的解釈をも適宜に加へ、一種の歴史小説の傾向を持つに至ったこと。⑤作中人物に一貫した性格を付与。⑥勧善懲悪因果応報の儒教仏教乃至はその混合した教訓。

なるほど、八文字屋の〈五冊物〉は、ひとことで言うなら通俗であり、小説として未成熟であった。その意味で、初期読本が〈五冊物〉の通俗性を否定的媒介とすることで成立したと見るのは正しい。しかし、後期読本が雅に走り過ぎた初期読本の克服を目ざした時、〈五冊物〉の通俗性に再度目が向けられ、両者の止揚が図られて行ったということも確かなのである。

通俗とは何か。従来あまり評判の芳しくない其蹟の〈五冊物〉の中で、それを考えてみるのも無意味ではないだろう。

享保四（一七一九）年正月、役者評判記『役者金化粧』が八文字屋・江嶋屋看板で上梓された。正徳四（一七一四）年『役者目利譜』京の巻・口上以来、「五六年も譏り」〔役者金化粧』・京の巻・序〕合ったという其蹟と白笑の抗争も遂に終焉を迎えるに至ったのである。

抗争後の其蹟について、吉田澄夫氏は「享保三年に和解した後、極めて平穩裡に提携を續けたやうである」（新潮社『日本文学大辞典』）と書いている。しかし実際は、そうでもなかったようだ。私は曾て、抗争期までの其蹟の著作について概観したことがあった〔抗争期の其蹟』『近世文芸』三四号〕。本稿では、その後の其蹟

について、とりあえず、江嶋屋の解散した享保八年頃迄考えてみようと思う。

一

野間光辰氏は、抗争の意義と、和解後の其磧の著作について、次のように総括している。

「八文字屋・江嶋屋の対立抗争は、當時の出版界を二派に分断するほどの一大異変であったが、とにかくこの事件を契機として、取材・構成・脚色は勿論書物の体裁に至るまで新工夫が試みられ、気質物や長編の歌舞伎・浄瑠璃のやつし物等を生んだことは意外の収獲であった。そしてこの二つの新しい形式は、両者和解後の八文字屋本に於ても中心を占めることになった。もっとも其磧が自笑と連名で出した八文字屋本にはやつしが多く、しかもすぐれた作品は少い。却て其磧が単独で蜀屋もしくは菱屋から出版したものに、気質物・やつし物の傑作が多いのは皮肉である」(『近世の文学』河出書房日本文学講座・六五頁)。

因みに、野間氏の言う「やつし物」とは、「浄瑠璃・歌舞伎を題材とした其磧の翻案物」(『浮世草子研究余瀟』『浮世草子集』日本古典文学大系・(月報)・昭和四一年一月・五頁)という意であり、和解後に著した其磧の浮世草子五三編中の八割六分、つまり四六編を占めることとなる。

野間光辰氏はそれら「やつし物」について、「すぐれた作品は少い」と評したが、藤井乙男氏も「退屈なこと夥しい」と貶した後、推測して言う「恐らく八文字屋の方には別に新作者が抱へられて、其磧の指圖によって作をなし、其磧自身は協定履行の責任上單に自笑と名を連ねたまでのことであつたらう」(『浮世草子名作集』・解題・二〇頁から二二頁)と。

しかし、この見解には賛成できない。なぜなら、そう考えたのでは自笑が其磧に歩み寄った理由を説明し切れないからである。そもそも利に敵い八文字屋が自店の利益を犠牲にしてまで、江嶋屋との相板に応じたのは何故か。それは、何よりも其磧の作品が欲しかったからではなかったか。また、役者評判記ならともかく、浮世草子是指圖して書けるようなものではない。長谷川強氏は、其磧の晩年の作品に安易さが見られるとし、「子の其跡あたりの補助の可能性もあろう」(『岩

波日本古典文学大辞典」とする。しかし、これにも左袒は出来ない。反証となるような資料が私の手元にあるからである。

(マ・以下同)

一 當分草双紙など書出候者に其跡と申す學多才の者有之由、其者二三冊ものを書候にも直段何程と究、五冊ものは拾雨にて書調事候由、夫をなせと申に、たとへおかしき事を書其其理分明ならざる時は、其書物判に不起候故、故事来歴を見合、一々引くらへ由緒儘成事を以、書立候故中々氣根不届候。右通高直成其代物書たてざる以前に請取、氣を慰さめんと至極結構成酒又は菓子などをこしらへ衣類にも羽二重などの能きをゑらひ着し、踊子又は三味線などにて一日を暮し候へは、最早右代物は則時に捨り候故、明日は又元のやふれ衣裳にかゆをすゝる事にて、其後一時に二三冊もの、四五冊ものを書調候由、幾度も其致様の由(『白鷺洲』卷四)。(註二)

『白鷺洲』は写本で、管見の限りでは四種ある(東京大学史料編纂所に三種、鹿児島県立図書館に一種)。しかし、他の三種は抄本で、右の記述を有するのは東京大学史料編纂所にある一本(大本五冊・島津家文書・II 6/11)のみである。その識語によれば、知覧の領主(久武)の養子島津久峯が、宝暦四年から十年までの七年間木村静隠老を訪ね、聞き書きしたものである。

因みに、木村静隠は、延宝七(一六七九)年七月二八日、木村時喜空山の二男として鹿児島に生れ、金平と称し、後に金左衛門、半蔵と称した(号時貞、守広)。二五歳の時、江戸で狩野探信の門人となり、鹿児島へ帰った後、二九歳で剃髪し探元と称した。享保一九年、五六歳の時、近衛閑白家久卿の招きで京都へ。同年の一〇月一二日から翌享保二〇年の四月一八日まで滞在。明和四年二月二二日、八九歳で没。浄徳堂法菴主と法諡し、松原南林寺墓地に葬られた(東京大学史料編纂所蔵『木村探元先生略年譜』、『木村探元伝記資料』、『大武探元に就て』など)。

なお、京都滞在中の見聞の詳細は、『木村探元上京日記』に記されており、「大仏に参詣」後「耳塚之前餅屋へ立寄賞飢」(鹿児島県立図書館蔵『木村探元上京日記』・享保一九年一月二九日)等とあって、其磧ゆかりの大仏餅屋にも立寄った形跡があり、そんな探元の耳に其磧の悪い噂が入った可能性も充分ある。少くとも、同時代人としての木村探元の記述は充分信頼がおけるものとして考えてよいと思う。

さて、『白鷺洲』の記述に戻るが、注意したいのは、晩年の其磧が売文家に堕し、「五冊もの」を拾得とし、「故事来歴を見合」せ「由緒憶成事」を書くように努めていたということだ。そんな状態の其磧が、息子に補助させていたとはとても考えにくいのである。ところで、そこに「五冊もの」という言葉が出る。これは、文脈から考えれば、長編時代物を指すと思われるが、これに関して、もう少し用例を挙げてみよう。

京都草紙屋八文字屋の浮世双紙五冊物、役者評判記三巻の事、自笑其磧といふ者述作にして、毎年正月二日定式にて大傳馬町鱗形屋孫兵衛といふ納草紙問屋買出せり。五冊物には名文も多し『塵塚談』『八文字屋浮世さうしの事』・文化二二。

ここで小川顯道は、「浮世双紙五冊物」という言葉を用い、「三巻」の役者評判記と対置させている。既に述べた如く「拙稿『八文字屋本』『研究資料日本古典文学』(明治書院)一九〇頁、八文字屋の浮世草子は自笑と其磧の抗争を軸として次の三つの時期に分けることが可能である。そして、各期はそれぞれ以下のような特徴を有している。

- (一)「元禄一四年から享保三年」↓作品数は約四〇種。書型は大本と横本がほぼ同数。五冊本が六割以上を占めるが、六冊本や三冊本もあって多様。長編と短編の比率は約六対四。内容は時代物がいちばん多いが(約四割)、好色物・町人物・気質物など様々。
- (二)「享保四年から(其遺稿の出版も考慮)元文三年」↓作品数は、約五〇種。大本、五冊、時代物、長編という形がそれぞれ八割程度。横本は一割余と激減する。
- (三)「元文四年から天明六年」↓作品数は約六〇種。大本、五冊が九割五分以上。長編、時代物が八割以上。

右で分るごとく、大本五冊、長編時代物という八文字屋本の形態は、(二)の時期を経て定着した。逆に言うなら、「五冊物」という呼称は、そういった八文字屋時代物の属性を巧く言いあてたものといえるし、私が八文字屋の時代物を、〈やつし物〉と言わずに〈五冊物〉と呼ぼうとする理由もそこにある。

二

享保三年冬、谷村清兵衛板の絵入狂言本『けいせい山樹太夫』(姪子屋座上演)は巻末に次の如き広告を載せる(『古典文庫』元禄歌舞伎集(統)『所収』)。

義經大和軍談 全部六巻 作者其磧
武道近江八景 全部五巻
右二色共に来ル亥ノ正月二日よりちがいなく本出シ申候御求御らん可ヒ下候
一此年讀完栄花物語 大坂風三右衛門 京都万太夫 大和山甚左衛門両三軒に狂言仕候 是にめづらしきしゆこうをくわへ全部五巻にとりくみ 来ル壬子月上旬二本出シ申候 御もとめ可ヒ下々

谷村清兵衛

注目したいのは後半である。「讀完栄花物語」とは、この絵入狂言本の題簽に脇書きして「大坂よみうりゑいぐわ物語」とあるので、『けいせい山樹太夫』を指すと思われるが、それに「めづらしきしゆこうをくわへ全部五巻」にして出すというのである。残念ながら、「壬子月上旬」に出すとした本が確認出来ない(註四)ただ、右で言わんとすることは分る。それはヒット歌舞伎『けいせい山樹太夫』を五冊物化、つまり浮世草子化するという宣言ではなかったか。もちろん、演劇を浮世草子化すること自体は、珍しいことではない。其磧自身浮世草子第二作の『風流曲三味線』(宝永三)からしてそうであったし、それは浮世草子の一特質を形成してもいた(拙稿「其磧のドラマツルギー『風流曲三味線』の光と影」『緑岡別林』第三号)。しかし、これほどはつきり示した広告は管見の限りではなかったように思う。ともかく、演劇の人氣を本作りや販売政策に利用しようとする時代だったのだ。そんな中、演劇に触発されて、其磧はどんな作品を作り上げたのか。ともかく見よう。

(註五) 『武道近江八景』

〔享保四年刊か。大本。五巻五冊。長編時代物。所見本(國立国会図書館蔵)に刊記や版元名はないが、谷村清兵衛・鶴屋七郎兵衛(先掲広告)・其磧の名前に有〕

〈序〉

忠と義と孝と仁と勇と智と恋と情の八つは君臣父子夫婦兄弟の八つの心に具する質、天性備はる人の身の上の名所とやいはん。見聞して感ずる、八忠具足(序オ)したる

所を八景となして、武士のいさぎよく深くはかなき心の海のしづかなるに準て、武道近江八景と題する而已。

めでき 月日

作者 其磧

梗概

江州高嶋の御館、佐々木高頼は竹生嶋詣の際、美少人芦浦益之丞を見染め仕官させたので親の益左衛門は出世。横暴つもの。高頼長男琵琶五郎は益左の追放を策するが、敦賀の遊女花菊となじんでいるのを、益左につけこまれ、逆に追放される。

忠臣の滋賀紋太夫は三八人の連判で益左を討つ相談。三井晩右衛門と益之丞は恋仲を装い、わざと殿の怒りをかい父の野望を挫こうとする。それを討とうとした百介はその心に感じ共に汚辱をこうむる覚悟をする。

高頼は離魂病となるが、紋太夫が彦山の伏鬼法印を頼んで治す。紋太夫は殿の病気の秘密を守るため法印を殺し切腹を図る。それを止めた妻は、法印と密通したこととして自分を殺せという。妻の父の鏡山立見は口論の上法印を殺したこととして切腹しようとする。妻の弟弁十郎はすべてを聞き、男色の争いから法印を殺したこととして切腹。

大津米問屋の左右衛門・哥仙夫妻に、琵琶五郎・花菊夫婦は世話になっている。遊女の千代橋をめぐり、五郎と虎八は争い、左右は打擲されて帰る。花菊はこっそり千代橋と会い、虎八の女房と偽り、虎八が仲間と争うよう手管を仕組み、虎八の首をとる。益之丞は三井からの手紙を殿に拾われてしまったため閉門。殿の命をうけて、百介はこれを討ちに来るが、三井の覚悟を知り、斬ることをやめ、切腹してしまう。殿は怒り、三井一門は閉門。そして家来に命じて益之丞に事の実否を知らせ、結果によつて首をとるよう言う。益左は子に対し親を救うつもりで偽りを言えというが益之丞は拒絶して、許婚のぎんとともに僧となる。坂本の真戒坊方に琵琶五郎ら滞在するところへ僧衣姿の益之丞とぎんが来る。また三井も来てこれまでの経緯を語る。

益左は再び殿に重用される。紋太夫らは四二人の連判で五郎の勘気をとくよう殿に言う。しかし、殿は益左に助言され、勘気をとかない。紋太夫は益左を殺し、双方入り乱れての争いとなる。そんな時、刑部が殿の死を祈願した益左の願書を持参。益左の悪業が明らかになり殿隠居。五郎は六角判官として世を継ぎ、花菊は妹分として赤松某へ嫁す。お家繁盛。

本書については、登場人物の命名法、男寵による御家騒動等の筋が、当時の歌舞伎に拠っていることや、先行浮世草子の影響のあること等、既に指摘がある（長谷川強氏『浮世草子の研究』四〇四頁から四〇九頁）。しかし、現在までのところ影響関係特定の歌舞伎に限定出来てはいない。だから、それらとの関係は部分にとどまり、「構成単純な歌舞伎により苦心して筋を立てた」（『日本古典文学大辞典』）作品と見ておいた方がよいと思う。なるほど、『歌舞伎年表』や『歌舞伎評判記集成』

を丹念に繰れば、外題の似た『愛護若近江八景』（傍点筆者）（正徳五年七月・京極山座）や『武道傳來記』（同年一月・大阪沢村座）等を見つけることが出来、二、三の典拠を示すことも可能かも知れない。また、『日本眉間尺』（正徳三年秋・大阪風三右衛門座）も

本文に「眉間尺の左右衛門とて月代半分額にぬきあげ」（巻三の一）とあり、まんだら無関係とも思えない。しかし、一方で「額は眉間尺のごとくぬきあげ」（『世間子息氣質』巻二の三）という用例のある如く、それは其磧の常套表現でもあった。いずれにせよ演劇内容の詳細が分らない以上、典拠関係の追求には限界がある。問題は小説として、この作品をどう読み、どう評価するかだ。

「珍らしく實録風で、正徳三年刊の『百姓盛衰記』に似通つてゐる」（『江戸文学辞典』）と評したのは、陣鞍康隆氏であった。しかし、主君の毒殺事件、若殿大之助の遊里狂い、それによる財政逼迫。苛政に耐えかねた百姓達の蜂起。こうした一連のことをルポルタージュ風に叙述したのみの『百姓盛衰記』と『武道近江八景』とは大きな差がある。

①男寵による親の出頭②横暴③色遊びにより若殿追放④悪の跳梁⑤善側の家臣達の苦悶⑥善側の犠牲的行為による局面打開⑦悪の滅亡⑧若殿帰還し御家繁盛。御家騒動劇の常套的構図であるが、『武道近江八景』もこれを踏まえている。見せ場は、⑤と⑥であり、本作品でもその部分に多くの筆が割かれている。典型的な例が、「御国の為若殿の為心をつくす」滋賀紋太夫の切腹をとどめようと妻・義父・義弟らが次々と入り乱れて身替りに立とうとする場面（巻二の三）であり、「序」にいう「忠と義と孝と仁と勇」とがめまぐるしく交錯し、動きがあり、なかなかの好編となっている。因みに、後半、花菊の活躍を描く場面（巻三の一から三）は、全体の話の進行に無関係な部分であるが、「智と恋と情」（序）にこだわったためだろうか。

「大義は親をほろぼすといへり、主君の大事に傍輩はいふにおよばず、親兄弟でもかへり見ぬは臣下のならひぞ」（巻四の一）という時代物演劇の中心思想は、ここでも繰り返し述べられる。そして、それは「大行は細瑾をかへりみず」と展じ、その後の其磧の作品にも頻出することとなるのである（『義経後事談』巻一の二

・『出世握虎物語』・巻四の二など。参考として、他の作品との類似表現を少し挙げておこう。

○「勇士の本意はたゞ心を変ぜざるをもつて義とする」(巻一の三)『世間子息氣質』(巻一の二)『楠三代壮士』(巻一の三)『桜曾我女時宗』(巻四の二)

○「世間一般不有無底の人馬ありと郎康節伊川の間難落着せざる事餘冬序録にのせたらば」(巻二の三)『安倍清明白狐玉』(巻二の三)

○「孝子ハ父の美を揚て父の悪を揚すといへり」(巻四の二)『本朝会稽山』(巻八の二)

○「父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其中にあり」(論語) (巻四の三)

↓「世間子息氣質」(巻二の二)『風流宇治頼政』(巻三の二)『時義経』(巻二の二)『開分二女校』(巻二の二)

○「悪につよければ善にもつよし」(巻五の二)『安倍清明白狐玉』(巻五の二)

○「一子出家すれば九族生天」(巻五の二)『世間子息氣質』(巻二の二)『桜曾我女時宗』(巻三の二)

○「韓信市人の勝をくまうて恥を忍んで後帝の国七十余城の主となる。又越王は敵の不浄を告て会稽山の恥辱をすく」(巻三の二)『義経倭軍談』(巻一の二)『安倍清明白狐玉』(巻四の二)

また趣向の類似も掲げておく。例えば益左の命をうけた郡太兵衛が琵琶五郎に恋人の花菊を横取りされたと偽りの訴訟をして、五郎を追放させる(巻一の二)↓平正盛の命をうけた織部が、渡辺の綱らが天子に献上した乙鶴を自分の許婚と偽りの訴訟をして、綱らを失脚させる『安倍清明白狐玉』巻一の三。

三井晩右衛門が「表向兄弟分」の起請を書いて益之丞と偽りの恋をする場面(巻二の二)『風流七小町』で妾女と小野娘が変な仲でないと起請を書く場面(巻一の二)。

注意したいのは右の如く、時代物の緊張を導入する傍ら、「銀がかたぎの浮世」(巻三の三)と当世の相を書き、「世界のおこは女にあふては干鯉。目をぬかれぬといふ事なし」(同)として、遊里風俗の描写を混在させていることである。もちろん、そこに描かれた遊里は、「死なざやむまひのなげぶし」(巻三の二)を歌う当世の遊里であり、『西鶴置土産』(序)をパラフレーズしながら、こう書かれてもいる。「いづれ女郎買の珊瑚珠の緒じめさげながら此里やめたはひとりもないと。それしやのいひしことほりかな」(巻三の二)と。

翻って考えてみるなら、野村増右衛門事件(『けいせい傳受紙子』)に象徴される如く、益左衛門の如き出頭者の横暴も、当世の現象であった。時代物の器に、そんな当世を貪欲に盛り込んで行くこと、それが『武道近江八景』の方法であり、其碩時代物の基本的方法であった。

三

②『義経倭軍談』(享保四年正月刊。大本六巻六冊。長崎時代物。鶴屋喜右衛門・八幡屋清兵衛・菊屋七郎兵衛板・其碩の名序に有)

〈序〉

古今武勇を以て世に名を顕せし良將おほしといへども、堅きを摧き鋭を挫ぐのみにして、優美の行跡さらになし。たゞ敵を打破り武威をふるふばかりなり。然るに源九郎義経朝臣は、剛強武勇智謀兼備せらるるのみならず、情の道にふかく、好色風流の名將。公家武家町人の美婦にわりな(序才)き契りをこめ玉ふありさま。往昔よりの義経軍記に遠慮して書載ざる内證の諸分を集め、強優武恋の二つの軍配突き軍物語にやはかなる風流の品々を載るゆへに倭軍談と題する而已。

作者 其碩

〈梗概〉

義朝没後平家の天下。清盛は諸国の女集め。後藤家光は清盛の妾となるよう常盤を説得。常盤は牛若と会っての婦途、童たちにいじめられていた鴛を助ける。牛若は名僧により信高の娘お千代と恋仲になる。そして貴船まで逃げるが、そこで天狗と会う。天狗は鴛姿の時常盤に助けられた礼として、軍道奇生の術を牛若に授ける。宗盛の命をうけた与市が千代に横暴をはたらくところ牛若助ける。信高方で、牛若は千代が実は鎌田の忘れ形見(牛王の姫)であると告げられる。牛若は身分を明かし姫と密会。

二人の住む堀川屋敷の隣家は鬼一法眼宅。その名輪を落としてしまったことから牛若と鬼一の娘(桂の前)とは互いに魅かれる。甲頭巾の男(弁慶)、虎の巻を見ようと鬼一方に押し入り牛若に逃げられ弟子となる。牛若は虎の巻で兵法を学ぶ。鬼一は甥の湛海と桂の前とを無理矢理結婚させようとして争いとなり、牛若は彼女を連れて逃げる。

常陸坊海尊は義朝の妾腹の子(吉姫)の保護を命ぜられていたが、彼女は一二、三年前以前平家に連れ去られ行方不明。遂に遊女吉崎となっていたのを見つけたが、身請金の四百両がなく妻と心中しようとする。弟の関の次郎はこれをため、海尊は父の孝養にと毎夜五条の橋で千人斬り。それに黄金五十枚の賞金が付いたため、海尊が訴入して次郎が犯人としてつかまる。その金で海尊は吉崎を身請けしようとする。海尊がにせの訴人をしたと知り牛若と弁慶はのりこむ。一方、次郎の妻(ゆら)は七曜の女を求める鬼一に体を売り四百両を得て、駆けつける。すべることが分り牛若と姫とは姉弟の対面。海尊は平家の盛俊を装い湛海と鬼一とを争わせる。そして湛海を討

つた後、鬼一を味方につける。

牛若は奥州へ。その後を追ったお千代と桂の前は長範一味につかまり、遊女町に売られるが逃げる。牛若の一行は、長範らに襲われ、これを討つ。矢矧の上り御前方へ立ち寄った桂の前とお千代は、十五夜、更科と名乗り手紙の伝授。手紙の相手が牛若と分り騒動となり、長者宅を出る。熊坂長範女房（白波）は度会の三ぶ（伊勢三郎）に再嫁し夫の仇を討とうとする。しかし二人とも義朝ゆかりの人物で、相手が牛若と分って主従の対面。そこに二人の女を預け牛若は奥州へ下向。「源氏の御代となし玉ふも。もっはら此君の武勇智謀によって誠に古今未曾有の良将かなと世奉って称美せり」と結ぶ。

義経を主人公とした文学作品は、数多い（島津久基氏『義経伝説と文学』）。同じことが演劇についても言え、夥しい数の謡曲、歌舞伎、浄瑠璃が作劇され上演されて来た。其蹟は曾て、こう書いたことがある。「力白慢の公平に、嶋原狂ひをさするやうに、序破急なしに、初段からやつさねば、合點せぬ世界の人間」（『けいせい色三味線』鄙の四）と。『義経記』に代表される義経の伝記を、実録風になぞったのでは、人々は納得しなかったし、それをどう変形させるかといった「やつし」の時代でもあった。西鶴作とされる浄瑠璃『凱陣八島』（貞享二年春）は、好色な義経を造型したし、近松が作者に擬せられている『義経東六法』（同年か）には、静が五条橋で千人斬をするなど徹底した茶番がある。曾我物がそうであった如く、義経物も変形の手腕を競う時代だったのだ。

其蹟自身も後に『鬼一法眼虎の巻』（享保一八年正月）を書き、「古今未曾有の良将の軍略に秀たまふ品々を今略して著述る」（序）として、牛若に軍略を伝授する鬼一を義の人として造型した。つまり平家に仕える身であるが故に、敵方の牛若に兵法を教えることに苦悶し、僧正坊姿でこっそり行うことにしたり、虎の巻を渡すにも案を練り、娘（皆鶴姫）を勘当して形身として長刀を添え、その鞘に虎の巻を忍ばせて牛若に渡すよう配慮するのである（巻六の二）。『虎の巻』が正統的なに対して、『義経風流鑑』は「やはらかなる風流の品々を載る」と称する如く、歴史にはすべて女性が絡んでいるという極めて通俗的な史観に立ち、義経をめぐる三人の女性（牛玉の姫・桂の前・浄瑠璃姫）を軸に、話を展開させて行くなど従横である。

「誑平家」の奇のみ追ふのとは異った姿勢が見られ、歌舞伎に限る事は出来ぬが当時の演劇よりの影響を見るべきかと思ふ（長谷川強氏『浮世草子の研究』・四〇四頁）

と評されているが、私は演劇よりは、抗争期に八文字屋および、八文字屋と協力関係にあった中嶋又兵衛方から出された『都ひな形』（正徳四年）、『風流誑平家』（同五年）、『義経風流鑑』（同）などとの関係が深いと思う。つまり『都ひな形』は『十二段』の系譜に立つ浮世草子で、浄瑠璃姫と牛若丸との交流を描いているし「拙稿『都ひな形』論「硝子」一号」、後の二編は前後編を成し「平家」物語の大意を取って。又児童の便に近からん事を思ひ」（『誑平家』序）とか「（義経の俗説など）尤とうなずく斗をあつめ。新義経記」（『義経風流鑑』序）とした等と言って、著名事件や人物を徹底して俗解、当世化しているからである。また、『当世化』の方法もさることながら、後二者が章のはじめに教訓的言辭を配していることも気になる。なぜなら其蹟の〈五間物〉の叙述様式は、ほぼその形を踏襲するようになるからである。俗解ぶりの一端を示そう。

例えば鬼一は、化物を退治する役となるし、牛若丸はそこに奉公して、鬼一の娘千鳥の前と密会する。そして彼に降参させられた狐は、以後源九郎狐と名乗るようになったなどと書いているのである（『誑平家』巻四の二）。

三編の作者を私は未練と見ている（拙稿「未練と八文字屋」弘前学院大学紀要「一七号」）。その拙稿に述べた如く、この「素人の新作者」（『役者返魂香』京の巻・口上）に対し、其蹟は激しいライバル意識を抱いていた。そのことから『義経倭軍談』および『花実義経記』（後述）について、次のような仮説が導かれる。つまり、この二作は前三者への対抗作品として、抗争期に構想されたものではなかったろうかということである。原稿は出来、自陣の書肆に渡した。しかし、出版前に八文字屋との和解が進んでしまった。それゆえ、八文字屋との和解後に八文字屋以外の書肆から其蹟の作品が出されるという奇妙な結果となったのではないだろうか。この点については、次節で再度触れる。

『義経倭軍談』も義経の〈世界〉に当世を盛り込もうとした作であった。

○「海底の魚も天上の鳥も高けれ共射つべし、深けれども釣つべし」（巻一の二）『武道

牛若は藤原秀衡方で義経と改名。義経は平宗盛を頼朝に送るが腰越から先、入れてもらえない。梶原の命をうけた法師が義経反逆の言質をとるため長持の中から出て謀

叛を勧めるが退ける。弁五郎と土佐屋隠居（土佐坊）は静を争い、三百両の手付金を払うが、静が逃げたため決断所へ訴える。静の処遇をめくり義経と畠山重忠とが口論。佐藤忠信は金を払った弁五郎へということで収める。

義経は土佐坊が梶原の命をうけて静を身請けに来たのではないという起請を書かせる。そこへ弁五郎の世話になるという静の手紙がきて、怒った義経は間違えて土佐坊の起請を投げ捨て、伊方五郎に拾われてしまう。偽りの起請のために寝込んだ土佐坊を勧め伊方は義経を攻める。弁五が忠信の名代として静を請けたことを知った義経は忠信と争いとなるが、伊方らが攻めて来たので土佐坊を生けどり、伊方の首をとる。

土佐坊を討った義経は追手を逃れ西国へ。義経の命をうけて自分を討ちに来た来三太に対し、忠信はすべての因が静をめぐる義経と梶原の争いであり、その因をとりぞうとしたのだとちあける。義経は荒相模坊を訪ねて吉野へ。男装して義経を追う静を、横川学範と川倉法眼が奪い合い、宥快法師は自分のところへ逃げてくるよう誘う。それに応じた静は書物置箱に隠れるが義経に見えされる。二人口論となるが宥快は静との仲介を条件に義経をかくまうという。二人の仲を疑った宥快に静は自分の胸に手を触れさせ、女と知らず。吉野山を包囲した横川と川倉を争わせるよう忠信と静は仕向け、学範は川倉を殺し切腹。

義経一行は作り山伏となって秀衡方へ向うが、富樫が関を据え、侍一人か静を身代りにすれば通すという。義経は静を残す。関を通る一行を富樫は追ひ、小袖と共に静を渡す。実は義経が家来と女とのどちらを大切にするかを見極めようとしたためという。一行は秀衡の世話となる。衣川の館で義経は女達の風俗をさせ遊び尽くす。秀衡死後、嫡子の錦戸は静にふられた恨みから謀叛。泉の三郎が身代りて死に、義経は蝦夷に逃れ百余歳まで生きる。

『義経倭軍談』の後編ということで、その史観も変わらない。つまり、ここでも義経の艱難はすべて、静の美貌に起因しているとするのである。梶原景時の讒、横川学範や川倉法眼の攻撃がそれに基づく他、富樫の「安宅の関」までも義経の鼻の下長さを見極める場となり、遂には秀衡の嫡子錦戸にまで攻められることとなるのである。

注目したいのは、佐藤忠信の活躍である。吉野山で義経の身替りとして壮絶な死を遂げた（『吉野忠信』）とされる彼は、ここでは「わけ知り」として奔走する。なおここでも「雨にぬれたる白牡丹の匂ひをふくむにことならず」（巻四の三）と静の美貌を雅文で形容する一方、「とかく女郎と夏豆腐は間がある」（巻三の一）等という俗言を混在させてもいる。また、其磧の歴史を見る目は、次の言葉に凝縮されている。

清少納言がさしあひのなひ枕双侍に何事も古き世のみぞしのはるゝと書しは大きなあやまり。外の事はしらずおつとつていにしへの遊女町と今をくらべてさりとては義経の出された時分の六条の傾城町の貧乏初心さ（巻一の一）

其磧は曾て『枕草子』（三〇段）を踏まえて、「過にし方恋しきものと、清少納言といへる女郎（傍点筆者）が書いているが」（『遊女懐洗濯』大坂の一・『野白内証』序）と書いたことがあった。つまり清少納言を俗のレベルに引きずり下ろす傍ら、当世礼賛の立場で歴史を見ているのだ。歴史を扱いながら、歴史に遊ばないという彼の時代物に対する創作姿勢は、この一事に象徴されているのである。

五

80 『補三代壮士』（享保五年正月刊。大本五巻五冊。長編時代物。八文字屋八左衛門・江島屋一郎左衛門）

〈序〉

をのがすこしき藝をたのんで、分際に過たる望を企。身をほろぼす愚人おほし。人は相應のねがひをして、かりにも邪成道をおこなふ事なかれ。かならず胆智のもの徳なくして。大袈をむさばらんがため、人もたのまぬ高名だてに人もそこなひ。其身も滅して悪名を残す。むかし咄を菊屋酒、（序才）茶碗に引かけて。のんだほど我知がほに古老の物がたり。取集て三代壮士と。狂言づくしの看板をそのまゝの題号

享保五ツ
年の始

作者 江嶋 其磧
八文字 自笑 印

〈梗概〉

富樫の家来、轟雲右エ門は、七、八年虚病で引籠っていたにも拘らず、暴れ者を退けたことで改易される。そこで甥（芝岡半平）に娘（おきく）を買ってくれるよう頼む。半平は今井弥藤次の姉娘（お雪）を和木主膳の仲人で貰うことになっていると断る。そして妹分として預かる。半平の伯父、芝岡丹五右衛門（近年の出来出頭）はわざとおきくの前で雲右の悪口を言い、おきくを引きとることをやめるよう言う。半平が断ると丹五は義絶と言う。

丹後からおきくと半平の不義を聞いた弥藤次は娘をつかわすのに嫌気がさす。弥藤次はおききに飯桶をつかわせて会わせず、半平からいとまの状をとる。

若殿（富樫左衛門ノ佐）の軍師（南木岩柳）は、楠正成のおとし子と名乗り丹五一味に加え、太守父子にとて変ろうと悪心。安宅の関右衛門の義弟千束文左衛門（妹おかんの夫）は出奔中であるが、岩柳はおかんの見染めくどく。おかんが妾奉公。そこへ文左が帰る。娘のおとらが妾奉公のことなどを口走るので関右はおとらを殺し、堂の下へ隠す。自害しようとしたおかんの刀が畳に刺さり、その先に血が付いたこと

で、おとらの死骸が見つかる。関右は岸柳の謀叛の証拠を探るため、妾奉公させたのだと明かし、自分を討つよう言う。しかし、文左は涙をこらえゆるす。

岸柳は夜明け方に手水から水気が上るのを見ておかんを疑う、長持の中から文左が出て親の仇を討つ法の伝授を乞う。そんなところへ丹五を討ったおきくが岸柳に保護を求めて来る。岸柳方の食客となっていた雲石は切腹して娘を救う。

文左は偶然のことから茶屋の井戸へ毒を入れ大殿を殺す計画を知る。半平はお雪が笹野しづま方へ嫁入りすることを知り、婚礼の場に白装束でのりこみ、弥藤次としづまを討ち、切腹。岸柳はこの騒ぎに乗じて一家中を同士討させようとするが失敗。取りかこまれた岸柳は自分は楠正儀の妾の子であるとうちあけ、切腹する。

序に「狂言づくしの看板をそのまゝ題号」とあるところから、享保四年七月廿

四日・大坂竹嶋幸左衛門座『楠三代男士』^(勇カマヤ)『大歌舞妓外題年鑑』・中之巻)との関係が指摘されている(長谷川強氏『浮世草子の研究』・四〇九頁から四一三頁)。

『楠三代男士』の詳細は不明であるが、「去存の楠三代男に、志井の成悦と成て、手水鉢よりけふたつを、きよりとながめられ」^(傍点筆者)「役者三蓋笠」竹嶋幸左衛門)とあることや由比正雪の一件を仕組んだこと等の共通点が見られ、其蹟がこれに拠ったということは動かない。

時代物の常套と言つてしまえば、それまでなのであるが、ここでも一編の主眼は、御家乗っ取りを図る大きな悪(南木岸柳)を、正義が克服して行く過程で踏みにつられる小さな善への照射にある。逆心の証をつかむため岸柳に妾奉公したおかんを弁護して、安宅は言う、「一つは主君の御為。二つには夫の悪名をすゝぎ。三つには国民のためなれば」「不義にて不義ならず」(巻三の二)と。既に述べた如く、『武道近江八景』にも、夫(紋太夫)の大望実現のために進んで不義の汚名を着ようとする妻が描かれていた。そして、それは紋太夫をして「異国本朝むかし今。節に死したる貞女おほしといへども夫の命にかはらんため。不義せし女と死後迄恥をのこし死に趣^{おもむ}はそち一人ためしなき心底」と、賞美させるものでもあった。一編の各要素は、この〈犠牲の美学〉を描くために配されていると言つても過言ではないだろう。

なるほど、其蹟が歌舞伎の人氣を利用して、この作品を書いたということは否定できない。しかし、両者の関係をあまり過大に考えることは、その歌舞伎の内

容の詳細が分らない現状にあつては、賢明とは言えないのではないだろうか。本作品を見直して行く際、重要なポイントが二つある。

一つは、巻二の三の冒頭に配された医者随筆の如き文章の存在。其蹟はそこに「それ醫道は。人の生死をつかさどるおもき職分」と書き、以下一七行に亘り、有徳人の太鼓を持ちたり、銀の口入をししたり、妾者の肝煎りをしたり、仲人、墮胎剤の調合、病人方に長居しての仕方咄、という具合に当世医者の墮落ぶりを剔出して行く。つまり、繰り返し述べている如く、時代物であっても、そこに描かれているのは、当世の風俗なのである。歴史を舞台としながら、そこに当世風俗を描き込むこと。因みにそれは、西鶴が曾て『武道伝来記』(貞享四年)で試みた方法でもあった。^(註七)

二つ目は、加賀前田家に於ける最新の事件をや、つしながら導入していることである(長谷川強氏・前掲書・四一三頁)。「月堂見聞集」(巻二)には「(享保四年)四月三日、賀州大聖寺御城主松平備後守殿御家中婚礼に付喧嘩」とあり、右の如き内容を「六月下旬之比加賀問屋方」の情報として伝える。

享保四年四月三日。前田家の家来、芝地三平(千石)が婚礼をめぐって、娘の親大聖寺城主松平備後守家中の玉井弥太夫(八百石)と討ち合い、ともに死んだ他に、死傷者が多く出る

其蹟は、その芝地三平を芝岡半平と替え、轟雲右衛門から娘のおきくを託されることとし、相手の玉井弥太夫を今井弥藤次として彼の許婚お雪の父とする。また、仲人の伊木左膳を和木主膳とし、半平の伯父丹五右衛門から半平が不義者という讒を聞くこととする。また、婚約を破棄された半平が、後の聲の佐々木数馬を(≡笹野しづ磨)らを討ち、「手負死人両家におよそ四十余人」「一とせ塩治判官の家臣四十七人の敵討よりは、すさまじき事と武家も町人もとりどりの評判」(巻五の二)という混乱ぶりを描くのである。

岸柳の陰謀譚に、この最新のトピックを取り合わせたことで、作品は散漫なものとなつてしまった。ただ、これで其蹟が、時代物の枠に〈当世〉を如何に盛り込もうとしているかが分るし、今まで漠然と読み過ごしている部分にも、様々の仕掛けがあることを予期させる一編なのでもある。

六

⑧『風流宇治頼政』

〔享保五年正月刊。大本五巻五冊。長編時代。物。八文字屋八左衛門・江島屋一良左衛門〕

〈序〉

げにや遠国にて聞及びに宇治の里。山の姿尖からず。ほんしやりとして。いはゞよき女の立るがごとく腰を廻る雲の帯。霞の衣。捨所よく。しかも御茶所にして色好る人の住る所は爰成べし。川の流れ絶ず水卓散に満々たるあんなつは金花咲山吹の瀬を我物にして天晴見所多き名所かな。里人の案内にて名所旧跡（序才）残なく尋ねしに、中にも源三位頼政の昔語を聞て痛はしや。さしも文武に名を得し一人なれ共、跡は草路の道のへと成て行人の口号今に傳へて。茶飲物語を書集。風流宇治頼政と題する而已。

めでたい年の
目出度初春作者 八文字 自笑 印
江嶋 其碩 印

〈梗概〉

源三位頼政の娘龍田の前は男装で兄（源太兼綱（道））に異見しようとして出かける。兄と思つて編笠をとり上げると瀧口。そこへ花千代を身請けした兼道と瀧口の弟源之丞とが来る。弟を切るうとする瀧口に対し龍田は自分と言ひ交した仲と言つてとめる。そこへ、頼政家立て直したための二万両を才覚したと言つて下河辺が来る。そして、約束通り龍田を貰うつもりでいる。姫は源之丞と出奔。頼政は渡辺十七唱の娘（ぼたん）を龍田の身代りとするよう頼む。頼政妻あやめの前十三回忌。そこへ龍田が忍んでくるのを源競女房（あじろ木）が見つけ打敷にかくす。姫を見てもお構いなしという約束で、唱は打敷の中から姫を出す。

平家の惣名代として盛俊と高橋判官長綱とが来て、獅子王の剣が宗盛に二万両で売られたこと、小松大臣育王山ころさしの菩提金三万両を私用に用いたことの詮議。下河辺の横領がバレる。また金の使い道を詮議された唱は、若殿が色遊びに十方兩つかつたと言ふ。そのため兼道はとらえられる。使者が帰った後、唱は皆が追及するのに対し、頼政が以仁親王のむほんにくみしたため、ここ二・三年金が必要だったのをごまかすためという。

兼道は阿呆払い。一來法師方で身の振り方相談。兼道の子を養子とすべく頼政と対面するが、花千代が茶うり姿で出て失敗。

千くさの前が嵯峨で野遊びをするところ兼道と会い、遊女に夢中な許婚者のために自分も遊女の風を習いたいと伝授を乞ふ。兼道はその情熱にうたれ、自分がその許婚者であると名乗る。

兼道は姫の兄（忠綱）の下屋敷へ。そこで宝剣をとり戻すため宗盛に戯れている花千代を見つけ、咎める。宗盛病氣。千くさは、からかさ法橋の使いとして、剣を渡せ

ば治ると偽り、剣を奪う。花千代と取り合いとなるが、二人は互いに心中を明かし和解。高倉宮ら三井寺へ。そこから興福寺へ移る途中落馬。頼政父子は戦いに敗れる。

演劇との関係は明らかではないが、気になるのは『役者三名物』（享保五年二月刊）に次のような記述が載ることである。

去年のかほ見せの狂言に、當正月の頼政程の藝をなされたらは、はんなりとはねませふものを（風三十郎 柳山座）

「當正月」とは、享保五年のこと。ただし、外題など詳細については、分らない。また、『風流宇治頼政』の出版が同年の正月であるから、影響関係について言及するのは無理かも知れない。ただ、むしろ興味深いのは、同じ題材を持つ歌舞伎と浮世草子が同時に公にされたということの持つ意味だ。全くの偶然とは思われない。別のメディアのものが、共同で何らかのパフォーマンスを成そうとする意図をそこに読むのは行き過ぎだろうか。

なお、享保二年二月十二日、三の替り、京早雲座（柳山座）では人気の『けいせい浅間獄』が上演されるが、その二番目として『駒ノ嘶ク宇治川の波』を演じたことが記録されている（『歌舞伎年表』）。因みにその歌舞伎では、芳沢小菊が高倉宮の役、大和山座から来た立岡染右衛門が頼政と、北国屋又三郎の二役、そして初瀬が頼政娘立田の前を演じ、乱曲輕業獅子の所作があったらしい（同）。先に延べた享保五年のものは、この再演とも考えられるのである。

なお、同じ題材を有する浄瑠璃に『源三位頼政（扇の芝）』がある。しかし、これは専ら頼政や高倉宮の没した後の、龍田前の行動や、田原忠綱の義に中心があり、金詰まりの頼政家のことや、子息兼綱の色遊びに筆を割いた『風流宇治頼政』とは大きく違っている。

其蹟は、ここでも歌舞伎等に喚起されながら、独得の「頼政」ものを造り上げた。例えば、兼綱が太夫の作法について長々と説く場面。つまり、「小まくらなしの大嶋田。首筋のをくれをきらひて」と、『好色一代女』（巻一の四）に伝える当世の太夫風俗が盛り込まれているのだ。また、当世風俗を盛り込むということでは、「宇治なればお茶のよい女郎をあらんで」（巻一の二）と軽口を叩く一方で、

「今時は四五十の後家かみ切……知貞の妙貞のと尼名」（巻五の三）と言い、次のようにも書いてある。「若心中して打果なば上下六文のよみ賣の絵草紙と成、開帳市場のうたひもの、さいもの口さき」（巻三の一）と。なお、巻二の三には軍資金としての出資を隠すため、若殿の色遊びに使ったと言ひ逃れる場面があるが、これと似た技法が『商人軍配団』（巻三の一）でも用いられていた。〈趣向〉の利用は町人物、時代物を問わないのである。

七

【『浮世親仁形氣』】〔享保五年正月刊。横本五卷五冊。氣質物語。八文字屋八左衛門・あじまや・良左衛門〕

〈序〉

年々花は替らず。歳々人同じ姿にあらず。きのふは厚鬢の粉といはれ。けふは天窓ニ毛のない親仁とよばれて。壮年人におそろしがられ。色ある身ニ憎れて。せふ事なさの談義まいる。おかしからぬ日をわたるは。年寄の心のとりおき。鈍なるゆへ也。形は変とも。心さへ古めかしう持ずば。誰かおやちとて蜆虫のやうニ。はらいのける人はあらじ。世は次第送り。異見きくむす子。異見する親仁になるは。今の間の事ぞかし。爰に一変りかわりたる。親仁どもの形氣を聞つたへて。すぐニ題号として五冊集て。世の老人達ニ示す而已
驚のはつ子の日

作者 江嶋 其礎印
八文字 自笑印

『浮世親仁形氣』は、享保二年八月に予告されていた（『世間娘容氣』見返し）が、刊行は遅れ、二年四ヶ月後に出ることとなる。詳細については既に書いたことがあるので贅言しないが『拙稿』『浮世親仁形氣』論『弘前学院大学紀要』一九九号、序で言う如く、「形は変とも。心さへ古めかしう持ずば」として、心の硬直性を鋭く衝く一方で、江嶋屋の経営に於ても不甲斐なかつた自分自身を戯画化して見せたのである。

【『役者色仕組』】〔享保五年五月刊。横本五卷五冊。世話物語。八文字屋八左衛門・江嶋屋・良左衛門〕

〈序〉

世の人の既び詩哥勸揚弓。琴笛鼓。香會茶の湯は尋常なりと。栄耀のあまりに座敷に舞臺を建させ。男女の家来を役者ニ仕立て。三ヶ津にて名をしられたる上手の風をうつさせ。不断狂言をして又もなき慰みと極めぬる男あり。母方は昔日北野ニして。

お國と名を取女歌舞妓せし。妓女の末とかや。其所縁とて栄花の身なれ共。万の藝ニ心をよせず。面は紅花白粉を以て光彩。身には異なる衣裳をかざりて。狂言をのみ染みぬ。誠ニ念は生を引といへるは是なるべし。みづからなせる所のものやうを取くみ。もつはら色を交て仕組めれば。役者色仕組と名づけて。座敷狂言の題号とする而已
于時庚子のめでたい
花の盛月
作者 八文字自笑 印
作者 江嶋其礎 印

『役者色仕組』は、序にいう如く、「座敷狂言」に於ける九種の劇中劇を中心に構成されている。それは曾て、西沢一風が得意としていた方法であつたが（『御前義経記』巻八の二・三）、其礎自身も『寛瀬役者片氣』（正徳元）で試みていた。そして、ここでも「登場する三都の人氣俳優の」舞台に於ける役柄を、その性格行動に持たせ（『中村幸彦氏「八文字屋本集と研究」』（解題二七八頁）の努力をする。因みにこれは『三ヶ津 役者不断氣質』（享保三年二の替京蛭子屋絵入狂言本の正本『なこや山三上藤雛』中下巻の見返し）が変形したものかとも『中村幸彦氏・前掲書』二七八頁、『役者三名物（六）』（享保四年十二月一日京・沢村長十郎座絵入狂言本『大和路陰陽泉』付載予告）の趣向が流用されたものかとも言われている（長谷川強氏『浮世草子の研究』四八四頁から四八五頁）。

発端は、富田の大樽屋久米右衛門（數万貫目持の酒屋）の妾腹の子は、今、芳崎綾野という名で役者となつてゐるが、重手代三木右衛門は男色を装い、これを見つけ出す。綾野は舞台の方が面白くして帰宅を拒むが、毎日様々の狂言をして遊んでもよいという条件で、大樽屋へ戻ることとなる。以下、若旦那の先導で皆が演じた、九種の世話劇が描かれていく。他愛のない軽い話が多いが、文章は凝つていて際どく、「ゆかし恋しのたまり水打あけ」（巻二の四）というような表現が多用されている（巻一の二など）。

いずれにせよ役者の得意云を中心として配役が成され、作劇されているのは確かだ、その「仕掛け」を見ぬくことが見巧者の条件となるが、『役者評判記』程度の武器しか持たない私の手には余る。ともかく、その様子を示しておこう。

①「当流ぬれ事の開山やつしの名人」（『役者五重相傳』）の大和山甚左衛門に、身をやつさせ、陋屋で昔の恋人の小らんと会わせる（『登り詰た恋の山と山』巻一の二・三）

②『好色盛衰記』（巻一の四）の筋を借り、「男つきうつくしうて風俗しやんとして」（京

中の女中さんがたのひいき」(『役者舞臺小袖』)と評される榊山四郎太郎が、その評判通りお花という女美人に執心をかけられ、その誘いの手管に乗る(『娘の肌は雪よりも四郎太郎』巻一の四)。

③「此人の実は当流のひんぬき」(『役者金化粧』)と言われ、硬いばかりでない実形を得意とした沢村長十郎は、自分の妻を亡父の妻と偽って自家に導き入れる養子婿を演ずる(『女の鬘』恋の水溜る沢村』巻二の一・二)。

④「何をあてがふてもおちのない御上手」(『役者舞臺小袖』)の榊山小四郎には、男装の美女の手管に陥る源五兵衛(『好色五人女』巻五の四)のような男色好みを演じさせる(『恋舞は家の宝枝葉榮ゆる榊山』巻二の三)。

⑤享保三年頃に座本をやめ、伊勢の芝居などにした後、享保四年の顔見世に久しぶりに京都の舞台を踏んだ嵐三十郎も早速動員される。「やつしのそわ／＼する」(『役者三蓋笠』)と評される彼は、「三等城右衛門以来」の「きれいな敵役」(『役者舞臺小袖』)の山中猶十郎がおゆきの後夫となろうとするのを退け、彼女を奪って逃げる(『姑を語り詰た浄瑠璃の三十郎』巻二の四)。

⑥「ぬれやつし」は「極の一字」で「近年実事やつしを仕りまして、荒事をいたしませぬ」(『役者五重相傳』)と評されていた市川団十郎は、ここでも濡れを演じ、「今団十郎がぬれと実とをかねたる上手のしこなし」と表現される。そして「御江戸立役の御立物」(『同』)の松木幸四郎や、「お江戸目の出の役者」(『同』)大谷広次らと婚礼の混乱劇を演ずる(『方便生鯛は婚葬』巻三の一から四)。

⑦「すこし芸にかたき所あり」(『役者五重相傳』)といわれる勝山又五郎は、お竹と、よはき風「入よし」(『同』)とされ、勝山より一割増の評判をとる三升屋助十郎は「色事にぬかりのない。女たらしの上手」として若後家との密会をそれぞれ演ずる。一方、山中平九郎は「年老し給へ共、藝にみじん見おとしなく」(『同』)と評されているが、ここでも「友達中間にておやぢ／＼ともてはやす。山中平九郎」として嶋村蟹に化けて、お竹の嫉の強欲を戒める頼り甲斐のある敵役として出る(『女舞臺艶書浜細沙』巻四の一から四)。

⑧「若ふして上手なりと大坂中の御ひいき六方は凡三回無双」(『役者舞臺小袖』)と評される三代目嵐三右衛門は、「むかし六法の袖なり」という枕詞で座敷狂言に登場し、『武家義理物語』(巻一の二)を踏まえた姉妹の交換劇を演ずる(『悪女染め嫁入小袖』巻五の一から三)。

⑨「昔から何事をせられても上上吉の位はおちぬ人」(『役者舞臺小袖』)と評され、道外から立役に転じた金子吉左衛門や「筆にも盡されませぬお名人」(『同』)の小左川十右衛門らは茶会場で点描され、「藝の外に男つきのきれいな所に皆々がおもわく」(『同』)と評され、女性人気が高かった坂東彦三郎は、その評判通り白人たちに誘惑される(『初雪の茶湯色咄の口切』巻五の四)。

八

③「女曾我兄弟鑑」

〔享保六年正月刊。大本五巻五冊。長編時代物。八文字屋八左衛門・江島屋一郎左衛門代〕

序

初黄鵠の聲やはらかに、京女郎の物ごしをきくにひとしく。心玉もぬけて柳腰のなよやかなる風俗。梅のかほりを袖に移してときめかす曹輩の艶女。父の讎を復て名をあげし。浄瑠璃の節をこめたる世の中の女の手木(序才)とやいふべき。十郎五郎が手柄にもおとらぬ。是ぞ女曾我兄弟鑑とくれなき一枚看板

于時めでたい

年の始

作者 自笑印
作者 其微印

梗概

周防の国、大内の助義陸の家来陶大膳暗賢は娘の八重垣が殿に気に入られたことから、成り上がる。一方、雲州の佐々木蔵流の遺臣妻龍勘介は主君の遺子光姫と義隆との間に出来た義丸を世に出すため七年間訴え続けるが、馬淵外記左衛門のために志半ばにして証拠の宝刀(龍泉)を残して倒れる。それを、乞食姿の宝積瀬平次は拾う。また勘介の娘千とりは父を助けるため朝倉という名で遊女奉公をして和布刈新(貞)左衛門と馴染み年季明けを楽しみにしていたのであるが、父が契約を再延長して金を借りたことが判り絶望する。女房のお長(蝶)が朝倉の妹ということもあり、瀬平次は拾った刀で金を作ろうとする。刀を見た姉妹は父が殺されたことを知る。お長は、本来ならば自分が遊女奉公する筈だったのに、逃げるために姉に迷惑をかけたということで、八千代という名で遊女となり、千とりを救う。

宝積の普賢堂に「白き水(泉)より龍が剣を吹く絵馬」を掲げ存在を暗示したことで、義丸は父子の対面が叶い、真左衛門と瀬平次も仕官が叶う。父の敵と言われ、追い詰められた馬淵は大膳を語らって謀叛。全盛の八千代に馬淵は通う。姉妹はこれを討つが、千束文右衛門に「殺し手はきやつなれども、敵といふは大膳なり。たとへばむかしの工藤左衛門すけつね、其身は京にありながら、あふみやわたに申つけころさせし同前」と言われ、大膳を狙う。大膳が長生の薬を求めたことに付け込み、姉妹は大膳を討ち、大内の御家再興となる。

序に、「浄瑠璃の節をこめたる世の中の女の手木」とあり、当然該当する浄瑠璃との関係が問題となるが、現在までのところ不明である。ただ、御家騒動と女の敵討という点、および八千代や外記左衛門という名が共通するという点で、『けいせい八万目』(享保五年万太夫座二の巻)との関係が指摘されている(長谷川強氏『浮世草子の研究』四一四頁から四一五頁)。

『曾我物語』に関連を持つのは、敵討ちを扱うことと千束の言葉(*)のみな

のであるが、それは皆て都の錦が次の如く書いて、元禄一四年五月九日に起った「亀山の敵討」を『曾我物語』に見立てた姿勢と似ている。つまり、無理矢理に『曾我』の盛名に関連付けようとしているということは否定できないのである。

伊勢の国土山に於て、辛巳五月九日の朝廿年来の恨をはれ。父兄の怨を報て日本の耳ををどろかす事。祐成が打太刀五郎が力瘤にもをとるべからず『元禄曾我物語』・巻一の「元禄一五年」

出頭人の横暴と、謀叛。「孝よりは忠を大切にすれば、臣たるものゝならひ」(巻四の一)という家臣たちの苦悶。毎度繰り返される御家騒動劇である。ただ、それに女の敵討ちを絡ました点に趣向がある。

因みに、巻五の二には、天子の隠し持っている不死の名酒を飲んで、処刑される時東方朔が、今殺されては不死の薬ではなくと言って赦された故事が載るが、これは、後に『記録曾我女愚船 篇本朝會稽山』(享保一三年正月)に於て、畠山重忠が、頼姫と猫間の少将の命乞いを頼朝にする際の台詞として次の如く改変し、固有名詞を明確かつ詳細にして用いられることとなる。

(漢の武帝の時、長生延命酒を童子が盗み死罪となるところ、東方朔が)「此酒の徳は。人の命長くたもつを要とするゆへ長生延命酒と酒銘を付られぬ。然るに此童子此酒をのんで忽に一命を失はるゝ上は延命の酒にはあらずして禍短命酒とや申べき」(と言つて赦される)。

まさしくそこには「故事米歴を見合、一々引くらへ由緒慥成事」(『白鷺洲』)を書こうとする其礎の姿が見られるのである。

構成は一貫しており、時代物長編としての体裁も整つてきている。しかし、古賢を屈折して見る姿勢は変わらず、「男女の嬌柔は、たがひに見骸をいだくと。女ざらひの東坡居士が壺を焼て置ぬれ共」(巻四の一)などと書く。また、時代物に当世風俗や当世の視点を盛り込む姿勢も相変わらずで、「今欲の世の中」(巻五の一)等と言う一方で、「こりや悪性の為替にして」(巻四の二)とか、「雲を見こみに買置した米に俄にさがりをうけた心地して」(巻二の一)という具合に、当世の商風俗を利用した俗文的表現も目立つ。

なお、仙人が不老不死の薬を求める悪につけ込む部分の「趣向」は、後に『三浦大助節分寿』(巻五の一)に再度用いられることとなる。

九

『日本契情始』

【享保六年三月刊。大本五巻五冊。長編時代物。江島屋一良左衛門・八文字屋八左衛門】

〈序〉

異国の李延年が妹の。美成容を自讃して。舞うたひける詞より傾城といひ初て、惣て美形の女の称号となれり。我朝にては契る情の心をもつて。遊女を契情と名づけしをむしやうに悩し男の目から。鉄臂も美人の媚と見て。李夫人のおもいをなして傾城といひしものか。抑此色(一才)遊の面白き酒事の濫觴は。嶋の千歳和哥前といふ白拍子の善禪解の帯銭になり始てより、今に其流をたつる女所々に一廓を構て全盛となす。その由て来る諸分を現し。契情の始と看板して狂言とする而已

于時栄ゆく

花濃三月

作者 自笑印
作者 其積印

〈梗概〉

鳥羽院のころ、玉藻の前は玉体近づき安倍泰成に調伏され妖狐となつて奈須の原へ。これを討つた三浦の介義孝は後宮の侍女千歳を頂く。しかし、千歳は義孝の弟和田五郎と深い仲であるため離縁を願う。五郎は家老古郡新五右衛門の妻おぬさに横恋慕したとして義孝から勘当される。古郡夫婦も退き閑居するが、そこへ五郎が来て、勘当されたがために古郡夫婦を巻き込んでしまったことを詫び、自分を殺すよう言う。夫婦はこれを赦し、夫婦を討ちに来たおぬさの父磯調松右衛門もそれを理解する。義孝は五郎と千歳を添わせるため千歳が狐だったと偽り、五郎方に彼女を送る。そのため、失脚した白拍子屋の鳥野千左衛門は五郎方に寄り、千とせと五郎を縛る。二人を助けるために、おぬさは和歌の前という名で遊女奉公に出る。廓が出来ても客をとろうとしないので、乳母のみやが遣手として駆けつけ、客を適当にあしらう。義孝の母清香院の命でぬさを請けに来た与惣次は、ぬさに不屈きな振舞いをしたため、自ら目を抉る。与惣次と念友関係にあった藤代万海の子万助は、ぬさに与惣次の思いを吐きさせるよう迫る。混乱の中で、新五右衛門の子松太郎は万助を殺す。新五右衛門らは、松太郎を自由にすると万海方へ送るが養子分とすることで治まる。和睦成り、義孝は千歳を姪分として五郎に与え、古郡は家老に復帰して、お家繁盛となる。

題名から想起されるのは、紀海音作の浄瑠璃『日本傾城始』(享保五年九月)であり、実際それを踏まえたと思われる部分も二、三存在する。しかし、長谷川強氏は両者の関係を検証した後、京の蛭子屋座『日本けいせい』の始りの上演が八

・九月の交と考えられ、これが『日本傾城始』に先行していることから、これとの「関係が深い作のやうに考へられる」(『浮世草子の研究』四一八頁)としている。しかし、『日本けいせい』の始りの詳しい内容が不明な現在、これ以上一步も進めない。私に気になるのは、全く違った歌舞伎「けいせい御菩薩池」(享保五年大和山座・正月一五日・二の替り)である。『役者三名物』(享保五年二月刊)には挿絵が載る他に、こう評判されている。

當二のかはりみぞろが池に。みだいの實子くまがへ半六となつて。一風仕出しの無意氣実といふしこなし。序中入迄は悲と見せての仕内(傍点筆者)あつは出来ました(傍点筆者)(柳山小四郎)

因みに、柳山四郎太郎は「瀧江殿の弟和山五郎となつてくるわにて大ばたらき」(同)という。なるほど、この歌舞伎の「世界」と『日本契情始』のそれとは大きく違っている。しかし、そこに和山五郎が登場し、「悪と見せての仕内」をしたことは確かなのである。其破自身「大あたり」(『役者三名物』)と評した歌舞伎である。それを變形しながら自作に「仕掛け」るのは、彼の最も得意とした趣向ではなかったらうか。

ところで、右では「悪と見せての仕内(打)」が、序から中入り迄あったという。この「〇〇と見せての」という方法について考えてみたい。「意外性」に歌舞伎の本質を見たのは、郡司正勝氏であった『かぶきの美学』。そして、その「意外性」は「〇〇と見せての」の時間に比例し、偽りの時間が長ければ長いほど倍化して行く。つまり、いわゆる「引つ張り」がどの程度持続するかによって、劇的感動の度合が決定されていくのであるが、その点、其破の浮世草子は甚だ物足りない。そして、この『日本契情始』も例外ではなかった。

なるほど、千歳をめぐる義孝・五郎兄弟の義理。古郡夫婦の忠。与惣次の目を扶るといった景清ばりの激しい行為等、本作品は劇的感動を喚起する道具立てを数多く持っている。従つて、五郎が不義を装ふことや、義孝が狐事件を仕組む等といった「謎」も多い。しかし、あまりにも種明かしが早過ぎる。そのため長編を貫く糸が弱くなっているのである。例えば、五郎の文を不義の証拠として成敗に來た父磯訓松右衛門に対し、おぬさは真実を告白しようとする。それを夫の古

郡が遮り、今まで何のために辛苦して來たのかと争うことで(巻二の二、一つの見せ場が醸成される。だが、次の章で簡単に真実は告白され、松右衛門はその心情を理解する。このように、極めて解決が早いのである。演劇と浮世草子の違いと言つてしまえばそれまでなのだが、この部分など長編としての構成よりは、各場面ごとの見せ場に意を砕く其破の作家的資質が如実に見えていと言えらるだろう。同じことが、「傾城」の由て来る諸分を現し」という「序」の言葉に呼応して、遊里用語を俗解した巻四の一・二にも言える。つまり、彼は「それ傾城傾国といふ名は、唐土の李夫人といふ美人をはめたる詞」(巻四の二)と相も変らずの俗解をする一方で、次の如く書いていのである。

○「向後舞まはぬ。遊んでゐる女どもを遊ぶ女といふ心で遊ぶ女と名付」(巻四の一)
○「いやおふいわずむりにとらへて。二階へあげるゆへ後には誰がいふともなく。むしやうに揚屋」といひ初て」(同)
○「あの女は和哥の前を何方へもやり手じやと」(同)
○「(童は)姉女郎のわるい事をかぶる」(巻四の二)

平将門の娘(将姫)がまだ伝來していない筈の鉄砲で狙われるという例(『松曾我女時宗』巻一の二『女将門七人化粧』巻五の二)に象徴される如く、其破の時代考証は大まかなのを特徴とする。ここでも「其比はなげふしといふ哥もなく、さざれ石いはほと成て二葉の松に千代かけてとうたひ」等と、時代を無視して自在に遊里描写をするのである(巻四の二)。其破にとって先行演劇とは、あくまでも「粹」でしかなかった。彼は先行劇の盛名を借り読者の購読欲を喚起し、その『歴史』の中に自在に当世を盛り込んで行くのである。

10

【図】『商人家職訓』(享保七年正月。半紙本五巻) (五冊。町人物。谷村清兵衛)

享保七年という時期に、谷村清兵衛方から其破の町人物が出るのは、いかにも唐突な感じを与える。なるほど、『世間手代氣質』の如く、其破の作品を他書肆(菊屋喜兵衛)が出した例もないわけではない。しかし、それは享保一五年のこと

である。やはり、「書捨の反古」(『役者三蓋笠』)と考えればよいのであろうか。ただ、この年には八文字屋と江嶋屋相板の浮世草子はなく、享保八年三月の役者評判記『役者頼振舞』を最後に、江嶋屋の名は消える。つまり、この翌年(享保八年)に其磧は、江嶋屋を解散し、末子源吉(其跡)と共に、三条東河原町の叔母簀の治右衛門方に身を寄せることとなるのである。そう考えると、其磧と自笑との間に何らかのトラブルが生じて、契約が破棄され、谷村へ其磧が再度接近を図ったかとも考えられるが、いずれにせよ確証がないので、保留しておく。

〈内容〉

- (1) 京の出来分限仕合屋の一子金太郎、商売に疎いので、伏見街道の小質屋作兵衛方に奉公に出される。一方、作兵衛の子作太郎は若い。金太郎は質屋の客に同情する。作兵衛は金太郎の仁心に感心し、傷つくのを怖れ家に戻し、仕合屋の有徳と口論(巻一の「一から三」)、『永代蔵』(巻六の五)・『織留』(巻六の二)
- (2) 兄が漁に出て留守中、掛乞いに責められる。兄嫁が金策に苦悶しているのに対し、浪之助は踊りのけいこ。実は「役者は舞拍子事踊などが第一なれば」役者に抱えて貰い病父の人代にするためだったという(巻二の「二十不孝」)(巻五の二)
- (3) 諸芸に打ち込み過ぎて没落した話(巻二の二)、『永代蔵』(巻五の四)
- (4) 助五郎と加六。二人とも遊女に馴染むが、助五郎は儲けて使うので不動。加六もそれにならう(巻二の三)、『胸算用』(巻一の二)
- (5) 兩替屋に息子を奉公に出した親と、鍛冶屋に出した親。前者は後者を笑うが、前者の息子は没落。後者の息子は内ばで成功(巻三の二)、『永代蔵』(巻五の一)
- (6) 手代の取込み詐欺を見破る話(巻三の二)
- (7) 『西鶴織留』(巻六の四)を利用しての手代論(巻三の三)
- (8) ここでも、右の『織留』の手代に対する言辭が引用されている。また、『本朝二十不孝』(巻四の二)を踏まえ、「仕合はおもふにまゝならず」没落した榎本萬左衛門が一念発起し、買物問屋に奉公。私商いで成功するが、母に説教され主家を再建(巻四の一)
- (9) 刀差商売を律儀に務める主人、俄長者を養ひ、山衛に騙されそうになり、手代の太郎兵衛に説得される(巻四の二)
- (10) 中京の相屋の手代忠三。若旦那富太郎の色狂いを諷刺したことと退けられるが、間もなく没落した富太郎を助け、御家を再興させる(巻四の三)
- (11) 法体してまでも欲を張って死ぬ親仁(巻五の二)、『永代蔵』(巻四の一)
- (12) 玉光屋、惣領を残し、七人の男子を養子に出す。四人の娘の婿は、自家より身代の小さいところからとる(巻五の二)
- (13) ある有徳人、奉公人を家族のごとく扱い、成功(巻五の三)

曾て、其磧は『渡世商軍談』(正徳三年正月)に於て、手代の大切さを説いたし、それは時代物に於ける賢臣論とも相通するものでもあった(拙稿「抗争期の其磧」『近世文芸』三四号)。彼は、ここに於ても「家来の働きによって其旦那長者になれるは世間におほし」(巻五の三)と書き、手代の大切さを改めて説くのである。

注目したいのは、「奉公人は主取が第一の仕合なり、駄という名馬に取つきし蠅は、一日に千里ゆき、遅牛の尾に取つく蠅は、やう／＼五六里ならではゆかず」(巻三の二)と書いていることだ。つまり、この言葉は後に『出世握書物語』(享保一二年)に於て、藤七が金箱を作る指物職人の様子を見て、嘉平次から小田春永へと奉公を仕替る際の重要な台詞となっているからである。

また、既に述べたことであるが(拙稿「世間子息氣質論」『弘前学院大学紀要』一五号)、手法的に注目したいのは、巻二の一である。つまり、『二十不孝』(巻五の二)を利用して注目したいのは、巻二の二の親不孝譚を書くが、ここではそれを再度用いて親孝行咄へと逆転させている。前節で触れた「意外性」への志向がここに見られるのである。

以上、「家職訓」は出版時期・板元・内容など、多くの問題点をはらんでいるが、内容的にはこの時期の諸作と関連を持ち、主題も繋がる点があることを確認しておきたい。

㊦『芝居万人葛』〔享保七年春。横本五卷五冊。短編雑話物集。江嶋屋か。序に其磧の名有り〕

役者評判記の開口部を集めて、浮世草子風に仕立てたものであるから、言及しない。

むしろ、問題は何故それほどまでして江嶋屋(?)が作品を出版せねばならなかったかということである。因みに八文字屋は、同年の正月に『舞台三津扇』を単独で出している。これは既刊の役者評判記の開口部を綴り合わせ、前年の七月十九日に死んだ大和山甚左衛門についての記事を加えたものであり、『芝居万人葛』と似た性格を有しており、其磧自笑との間に何らかの磨擦があったことは充分想起し得る。

38 『風流七小町』〔享保七年九月刊。大本五巻五冊。〕
〔長編時代物。八文字屋八左衛門。〕

序

小野小町はさも往古は遊女にて。花の像かゝやき桂の眉黒細うして。白粉を絶さず紋目の衣装多して揚屋の座敷にあまりしぞかし。節供正月の仕手繁く。あなたの玉章こなたの文。かいて来る卸駕籠のせて悦ぶ三味線の。いとらしいこはねにて一節うたふ哥のさま。あはれなるやうにてつよからず。いはゞよき女郎の身場の借銭に。なやめる所あるに似たり。(序オ) 掛乞にあふてつよからぬは。おうなの身なればなるべし水よせて粹をしたひ。雲にむかふて月を笑ふ古今又あるまじき太夫職。全盛の有さまを。とりあつめて歌舞妓せしを。そのまゝ五巻の草紙に綴りて。人の心を慰るものなりし。

作者 江 嶋其磧 印
八文字自笑 印

梗概

維高・維仁(染殿后の子)親王世継ぎ争い。九月二日右近の馬場の競馬で決着させることとなる。真済と忠亮がそれぞれの側に立ち祈るが、染殿の后の計略に落ちた維高側の真済は集中力を欠き、維仁は競馬に勝つ。真済は染殿が忘れられず大伴黒主を語らつて謀叛。三種神器は行方不明、真済は紀名虎と名乗つて天皇を逃げ横暴。

小野小町妹小野姫は、大伴黒主との縁が決つているにも拘らず、神路山采女と恋仲采女の兄の三木進は采女を斬ろうとするが、二人は小町に悪評を立てる継母の意図を挫くためこうしていると明かす。名虎は染殿をくどくが埒があかない。小町は九十九夜通う深草少将に対し衣通姫の絵像の中にかくした三種神器を守ってくれという。少将は宝を預り、目を回したふりをして屋形を逃れ去る。

小町は継母が讒言したため九条の色町に売られ、全盛。わりびし屋の若後家あぐり(三木進妹)のところへ昔の夫玉造軍左衛門が来て対面。名虎は軍左と会い、昔、目を病んだ軍左を救つた時何でもすると言つたことをたてに、小町や染殿を渡すよう迫る。そこへ小野姫と深草少将が門付けに来る。少将は死んだと小町がいうので、何かわけがあるのではないかと少将は様子をつかがう。小町は妹の首を染殿のものとして出すため、わざと口論。深草少将は殺されようとして、わざと三木進に暗喩を仕掛けた軍左の心を見ぬき、三種神器は貫之に渡したと言ひ残して切腹。少将の犠牲的な行為により、名虎を縛ることができるが、彼は天狗となつて飛んでいく。残つた黒主はやりた放題。維高は母の遺言で一度だけ冠をつけたかったのだと明かして冠を返す。貫之と軍左は黒主を攻め流島とする。

序で「歌舞伎せしを。そのまゝ」と言うが、享保七年秋、京都の八重桐座(ほ

ていや座)で上演された『けいせい七小町』との関係が注目される(『歌舞伎年表』)。その様子を、享保八年正月刊の『役者春空酒』は、こう伝えている。

去々年の女将門の七人藝去秋の七小町の七変化は、皆女の事にみちんも男の形ちなし。其七人の女の風それれにうつり(萩野八重桐)

つまり、座元の萩野八重桐が小町を演じ、女将門の将姫の如く七変化を演じたというのだ。因みに、「七小町」とは(異説もあるが)、「さうし洗小町」「雨ごひ小町」「かよひ小町」「関寺小町」「そとは小町」「あふむ小町」「清水小町」で、別人に「玉つくり小町」があるという(『七小町物語』なお七小町については、拙稿「好色一代女」と小町伝説『弘学大語文』二一号・参照)。八重桐はこれを演じ分けたというのだろうか。因みに『風流七小町』が踏まえていそうなものは、「通ひ小町」(二巻二の一・「そとは小町」(二巻四の二・「玉つくり小町」(二巻四の一)などであり、他に大伴黒主の悪ということで『草子洗小町』と関連づけられないこともない。

もう一つ、歌舞伎で気になるのは、享保六年四の替り『大伴黒主花見車』(万太夫座)である。『役者藝品定』(享保七年正月刊)は、大伴黒主を演じた澤村長十郎について、こう評判している。

四の替りにとんと氣をかへられ。顔うす赤くあつて。大伴の黒主にて大あて。外につく兵もなく。通小町の段。狂言舞のしほらしき。又外に似せ手もない上手藝。

つまり、『大伴黒主花見車』は、「京二四年あはるゝ内ニ。黒主で當られたるより外。つゝゝ大入をとられた事なし」(『役者春空酒』)と酷評された澤村長十郎にとつて、唯一のヒット作であつたのだ。しかし、これも通小町の段があつたという点のみで、その筋の詳細が分らない。いずれにせよ、『風流七小町』の冒頭には、近松作ともいわれる浄瑠璃『維喬維仁位諍い』(延宝年中か)を踏まえたと考えられる部分があり、先型とした歌舞伎そのままだつたとは思えない。

大伴黒主を悪役とし、業平や小町など六歌仙を絡ませるという点でまず想起されるのが、『女男伊勢風流』(正徳四年二月)および、その続編『愛敬昔色好』(同年三月)である。抗争中に八文字屋から出されたもので、作者には未練が擬せ

られている〔拙稿「未練と八文字屋」『弘前学院大学紀要』一七号〕。

内容は、業平の遊里巡りに井筒・二条の後・若紫・小野小町・松風・村雨らが絡み、大伴黒主は小町を遊里に騙し売る悪役として、暗躍する。業平は都鳥大臣に同道し諸国の遊里巡りを続け、最後には黒主が懺悔し、業平の勘当も解かれるという荒唐無稽な筋である。

作者の教養を反映してか、古典の改変は自在で、『卒塔婆小町』『草子洗小町』『鸚鵡小町』『通小町』『関寺小町』など、小町関係の謡曲を数多く踏まえ、古歌や故事を読者熟知のものとして出す一方で、歌舞伎や遊里などの当世風俗も巧く盛り込んである。しかし、黒主を突如改変させて話を治めてしまう等、構成の安易さも目立つのである。

これに対し、『七小町』は紀名虎と大伴黒主の悪を一貫させており、長編としてまとまりがある。また、俗解も巧みで、小町が深草少将を百夜通わせたのは、三種の神器の強力な保護者を見つめるため(巻二の二)等とする。

また、文体は次のように美人を形容する雅文が見られる。

○色は遠山の茂き匂ひをほどこし、白き歯は雪にもたとふべし(巻一の二)。

○翡翠の筭はあたと姫^き姫にして、楊柳の春の風になびくがごとし。又鶯舌の囀りは。露をふくめる糸秋の。かごとばかりに散そむる花よりもなをめずらしや(巻三の三)。

その一方で、『西鶴』『好色一代女』(巻一の四)を借り、「こまくらなしの大嶋田」と遊女となった小町を描写したり「今世にはやる馬鹿共めが心中」(巻一の三)と書いたりもする。そして、其碩のアフォリズム集『絵本答話鑑』(享保一四)『絵本喻草』(同一六)に集約されて行く警句を次の如く配してもいるのである。

鳴子のない柿の木と。色盛の娘の子に。親のあまいは疵を付らるゝ基ぞかし(巻一の三)

先行歌舞伎『けいせい七小町』にヒントを得て『大伴黒主花見車』や浄瑠璃『維喬維仁位詩』などの『世界』と自在に絡ませ、独得の『七小町』ものを造型していったのが、『風流七小町』であった。

39 『桜曾我女時宗』〔享保八年正月刊。大本五巻五冊。長編時代物。八文字屋八左衛門〕

序

それ兄弟ハ専ら五に善を賣て。まじはるべき事朋友の道に同じ。利欲を先とすれば他人の始りといふ諺^{ことわざ}になれり。兄弟ハ手足のごとく常に離るべからずと。莊子の語むべなるかな。兄ハ弟を憐^{あはれ}ミ弟ハ兄に従ふ。曾我兄弟の昔語。末代に傳へて稱美し。さまんく略し浄瑠璃歌舞妓の種となして。貧しき(序才)曾我の御影にて。幾年か錢をもうける事ぞかし。孝行武勇ハ勿論。少将の夜の雨に。大磯の虎の尾ハ濡を含ミ。色盛成桜曾我的狂言を五冊となしぬ。

目出度年の
はつ春

作者
八文字自笑 印
江島其碩 印

梗概

工藤祐経は子の大房丸に、頼朝の妾腹の子梶の前を貰うこととなる。御所の五郎丸は梶の前と恋仲。少将の兄景清は頼朝を狙って屋敷に忍ぶ。祐経に発見されるが曾我五郎と偽って逃げる。祐経は景清を五郎と思い真犯人は俣野と言う。梶の前は五郎丸と乗物にかくれて逃げる。

虎は父の敵奥海を討ち仁田四郎に保護される。五郎は牛若の故事を踏まえ、男伊達の大將として河津の十三回忌に千人の聲を狙う。千人目をとろうとすると相手は母で、勘当される。十郎も取りなそうとするが失敗してともに勘当される。母親は虎を父の敵と狙う三尾屋四郎にしばらくられる。少将は五郎を装い母を助け兄弟の勘当をゆるしてもらう。そこへ仁田が来て虎を助けたことで祐経が虎と自分の仲を疑っているという。十郎は本懐達成後虎の代りに討たれるということで治める。

五郎は箱根別当行実の好意で名刀の髪切丸を盗みとる。五郎が盗んだという噂が立つが、五郎丸の仕業と言いつける。抗議する五郎丸に対し、本懐達成後捕えられ約束。一方頼朝を狙った景清は捕えられ、処刑されるが、観音が身替りとなる。頼朝に赦された景清はその心に感じ目を突き、日向の勾当となる。本懐を達した後、兄弟は約束通り仁田に討たれ、五郎丸に捕まる。五郎丸は出世する。

序で「桜曾我的狂言を五冊となしぬ」という如く、歌舞伎との関係がまず問題となる。該当するのは、享保七年、春上演の『桜曾我』(京八重桐座)である。『役者春空酒』(享保八年正刊)で、その様子を見る。

○秋野八重桐↓「去年の櫻そがは、五郎にあてられ……五郎が彫金文七風」○染川六郎左衛門↓寅の春櫻そがのすけつね大で。第一口跡よく万事口上をしてまいる○岡嶋元石衛門↓「去春の櫻そがに。だつたんぜんじと成。江戸山中平九殿風。さりととはよかつた」○上村吉彌↓「去年櫻そがの少将で。評判出きすがお功者」

五郎（八重桐）、祐経（染川）、だったん禪師（岡嶋）、少将（吉弥）という配役で、五郎が男伊達を演じたらしく、それが『桜曾我女時宗』にも取り込まれている。しかし、詳しい筋は分らない。因みに、大坂の嵐座、竹嶋座でも同外題で上演されており、『桜曾我』が上方でちょっとしたブームだったらしいことが分る（『歌舞伎年表』）。しかし、はたしてそこにも少将の兄として景清が配され、『出世景清』に見られるように目を出したのであろうか。また、頼朝の妾腹の娘征の前と五郎丸が恋仲であったり、五郎が五郎丸の名を騙り髭切丸を盗み、その借りを返すために彼に捕えられたとか、虎を助けた仁田四郎に、十郎が虎の身代りとして討たれた等という話連もそれらの歌舞伎にあったのであろうか。

序で言うごとく、曾我物を「さま／＼に略」す其磧の態度は自在だ。彼は曾て祐経の娘として白菊の前という美しい女性を造型した（『当世御曾我』『風流東鑑』）。また、一方では祐経を義の人とするなど（同・本朝会稽山）。因みに、風飄子『曾我鎌倉飛脚』にも有、『曾我』という素材に自在に取り組んでいた。ここでも虎を猫間中納言の娘とし、「ねこまの中納言が娘によって虎と名を付」（巻二の三）などとする一方で、兄弟が仁田に討たれ五郎丸に捕えられたという歴史的事実（？）に対し、どうしてそうなったかという謎とを其磧流に施しているのである。なるほど、それがゆえに、時代考証が甘く、祐経に伝来してもいない鉄砲を持たせたり（巻一の二・既述）、「しばゐ前の水茶屋。札賣店の燈火は星の林にことならず」（巻二の二）などと、ある筈のないものを点描するような誤謬を犯した。しかし、其磧の読者は、彼の浮世草子に歴史的事実としての正確さよりも、面白さを求めたのではなかったか。其磧はその要請を敏感に感知し、歌舞伎とはまた違った独特の歴史小説を作り出して行ったのである。

「この期の時代物と歌舞伎との関係は相当深い」（長谷川強氏『浮世草子の研究』四一九頁）という。まさしく、その通りである。しかし、長谷川氏自身も指摘する如く、自由な変改も目立つし、むしろ、そこに「当世」を盛り込むところにこそ其磧の真意があったようにも思われる。

なるほど、この時期の其磧の『五冊物』は、歌舞伎との関係が深く、その意味

に於て「歌舞伎の草紙」（『英草紙』）と評するのは正しい。しかし、それが歌舞伎そのままではないということは、はっきり確認できたと思う。江嶋屋解散後、其磧の浮世草子は浄瑠璃への傾斜を強めるとされる。その真偽は如何。次稿に続けよう。

註

一 引用は東京大学史料編纂所蔵本を用いた。なお後半部分は当面の問題とは無関係と思われるので省略した。因みに『国書総目録』は岩瀬文庫に版本があるかのように記すが、調査の結果『芸苑叢書』に活字化されたものを誤記したものとなった。

なお、この資料は『芸苑叢書』本とは異同があり、日本近世文学会秋季大会（昭和五十九年一月一日。於南山大学）に於て、『白鷺洲』の其磧」と題して口頭発表した。

二 この店は其磧の大仏餅屋に奉公していた者が開いた店だという（野間光辰氏御教示）。三 鶴屋喜右衛門板絵入狂言本『けいせい山樺太夫』（都万太夫座上演（見返し））にも、『作者其磧』の『武道近江八景全部』と『義経楼車談六巻全部』を「来正月二出」す旨の予告が載る。

四 この点について気になるのが、享保三年の一月に、八文字屋から『けいせい山樺太夫』をそのまま浮世草子化した如き作品の、『けいせい鼈照君』が出されていることである（詳細については拙稿『咲か五人娘』とその周辺『緑岡詞林』第三号・昭和五一年十二月）参照。八文字屋側が逸早く類似の本を出したために出せなくなったのか。それとも『鼈照君』がそれなのか、もしそうだとしたら谷村に予告したものが何故八文字屋に流れたのか、そして作者は誰なのか、など様々な問題が喚起されるが、稿を改めて考えてみたい。

五 頭の番号は、拙稿『抗争期の其磧』『近世文芸』三四号）で用いたものを踏襲した。

六 殿に氣に入られ足輕から成り上った桑内藩代官役野村増右衛門が暴利を貪ったため失脚し、宝永七年五月一日に成敗された事件（『月堂見聞集』四）。其磧はこの一件を『けいせい傳受紙子』にとり入れている（拙稿『傳受紙子』断断『青山語文』六号）。

七 拙稿『武道伝来記』論一悪の造型と非論的世界の醸成（『弘前学院大学紀要』二〇号。参照）。

原本の閲覧に際し、次の各機関の御協力を得た。とりわけ、東京大学史料編纂所の菊竹弘氏には閲覧の御便宜の他、様々な御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

○東京大学史料編纂所 ○東京大学中央図書館 ○同設亭文庫 ○東北大学図書館（狩野文庫） ○名古屋大学図書館（岡屋文庫） ○早稲田大学図書館 ○国立国会図書館 ○都立中央図書館 ○西尾市立図書館（岩瀬文庫） ○鹿児島県立図書館 ○東洋文庫（岩崎文庫）